平家物語武家論　　伊勢平蔵貞文著

一　左兵衛尉家貞といふものうたの作者の下り
ものべき威の腰差を差て左力服をさゝぐ
殿上の小屋ふうこまりてをりる
○うたのなかの作者ハおほかの者の作者ハ用し
○ものべき威の腰をハ蒔絵ハ用ひ
○腰袋ハ今腰差とゝなりあと今世腰袋とてあ
織物のものゝふて袋を腰に作るハ誤りと腰袋を
ものゝふの小付なるあと室町度のなか腰袋を
腰差とゝもいひしもたゞ下る集ふ者名をおしたる
下ゝの集と見べくあるのあとゝ思ハ誤りなるべし

一　観音坊ゝ黒糸威の腰巻にて白柄の長刀くき
みしかく丸物ゝ坊ゝ也　きおとしの腰ゝ白くゝ
ゝの太刀持ゝ

○　黒糸威の腰巻もよきおとしの腰巻ゝ見へゝ
○　白柄の長刀ハ柄と白糸ゝ
○　ゝゝ川の太刀ハ黒ぬりの太刀ゝ同ゝ巻ゝ

一　昭其日の装束ゝハきちんの直垂ゝ小板を巻ゝ
かへゝゝゝ腰ゝゝゝ　ゝゝやくゝふ仏りの太刀ゝ第二十
四さゝたる白羽の矢頁　重頁の弓腰ゝゝゝ胴
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ神懸の
○　きちんの直垂ハ麹塵の直垂ゝ麹塵ゝ腰ゝ

地ゝゝきゝて文ゝ黄糸ゝ牡丹唐草　山鳥の文ゝ織
たる天子ゝ御所の御ゝゝハ唐人ゝ用ゝゝゝゝゝ
ゝの文ゝゝゝ用ゝゝ　和漢朗詠集ゝ　楊柳ゝ
糸喘麹塵ゝ見ゝゝゝゝ　ゝゝ色の柳の色ゝ麹塵
の色ゝ見ゝゝて仏ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ

○　小板ゝ黄ゝ腰ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
○　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
○　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
○　白羽ゝ鷲ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○唯夜のうおけたる

○うつをを絞くこと言ふことをとハ書とぬきて肩の方へ出てうして書の法を為方の肩のうへ川紙しく書の為めに法を言ふ為にもたび身

○重りうひものるあるこ出

一小松の大臣なるとしこと矢ありつく伝せせる始る拝見ハ形惟盛ハ来常と云ふ也

○なとしこ矢有りくハ重意の装束ゑゑやのくいす矢を繋く有れしこ是ハ平胡籙か壺胡籙ゥ

出すす也意の形ハ装束図式と伝ふ所ゥ

○云ふやのくいを形籙由似ゥ壺胡籙背のし

丈小對しく平胡籙と云ふハ装束図式ようこゥ

一阿国梨祐慶と云ふ悪僧ゥ丈七人年有りゥ玉革威の鎧ゥ大荒目小こう形文ゥと革拵長ゥ為ゥ

胴を抜ゥ法師ゥ拵せ川ゥ白柄の長刀杖ゥ突

○玉革ゥとしの鎧の大荒目こう形文ゥ

為ゥ為ゥ為ゥしゑ

○白柄の長刀前ゥ乃ゥ

一入道板倉(ホウ)たゥ小ゥ為ゥこゥ世ゥ人の左ゥ

白ゥと大ゥ為ゥこゥ云ふ世ゥ柄の刀おしこゥ

伝ゥ為ゥ

○云ふ世柄の刀為ゥ記しぬ

二ノ十七
一 大政の入道清盛 赤地の錦の直垂に黒糸威の
腹巻の白金物打たる胸板せめて
○赤地の錦の直垂に黒いとおとしおこしたり
○白金物とハしろかねの金ものといふ也 銀金物也
○胸板せめてとハむないたハ胸の備とする処を
引合てしめたるを云
一 筑後守貞能ハ木蘭地の直垂に緋おとしの鎧着て
○木蘭地の直垂緋威の鎧前にしるしぬ
一 腹巻の上に帯ハ人の衣をうちまかせて着ひたるに胸板の
金物のかしかましく見えけるをかくさんと頬りて
衣を引ちかへてそしのひける

○胸板の金物ハ腹巻にある金物打たる成るへし
一 大臣葬の時用ける無紋の太刀なり
○大臣葬の時用ける無紋の太刀ハ柄鞘黒ぬりにして
くりかたも柄かしら金をもちゐすみな黒ぬり常元の
革にも文なき藍革を用ける也 大臣葬に用ける
あしく腹中出来しても〳〵太刀之
一 庭の下部の中に金武と云大力の剛の者にてきこゆ
腹巻着て同し毛の三枚冑の緒をしめ
○さへき白ひの事前にしるしぬ
○三枚冑とは三段に三枚なるを云
四ノ十六
一 信連が其夜の装束にハうす青の狩衣の下に

毛〳〵き白ひの板をと若〳〵情府のたりをそなへしりり

○うしなをのかり衣なる足〳〵たり

○ぞ〳〵き白も若ふ記もて

○情府のたりハ黒漆ふ足〳〵たり

一 信連（にノたセ）是を足〳〵指衣の帯仮引きりく拵る毎〳〵

情府のたりなれとも身をハ毎〳〵作らせたりを板

合〳〵

○情府のたりるれとも身をハ毎〳〵作らせたりといふを

情府ハたりハ俄りとして出足ケ斗りして身ハ毎

〳〵ものく信連ハ武勇の志ゆりを身をハ毎〳〵せし

めとふく情府のたりに作らせたりく

一 柏文の指衣ときくとち大きてふしたるふ宣代のき世ゆう

徹威の漆着く黒白の書ハ備をしえいる毎作りの

たりを帯ハさしたる大中黒の矢負徹口ハ

黒漆ゑれしとや言の羽〳〵ふしる的矢一ト白

そさしふたり

○柏文の指衣といふハ千歳文若こハ一ゑの役を減せ

ハ柏文といふを〳〵〳〵をう〳〵文を減たりとい

る〳〵しきくとちを大きてうふしてと云ハきくとち

菓の花のとく云〳〵めたる時きの事く黒指衣の

ふきの菓とちを身く隆世金ふしたるく その衣

水干のとくるく〳〵しきくとちとハ菓の花のとく

始きを作る也（きくとちといふハ竹にくりとちと
いふ事を略して云ふなり）又將してきく
どちといふ也日本記に蘇我蝦夷とくり蝦夷と云ふ
○云ふとしの渡前に見へさうり
○白星のうちとも前さうさうり
○いうもの作りの方法記しぬ
○大中黒笠作手方法
○鏑口の骨法忘れしとや書の相さくもいたりる
的矢一ひさし係ることいふハ鏑口のあさるのきこのハ
神矢を書りく樫廷ゝ的といさせくハ流有る
りりされハ鏑口を藤こ征矢とさしてハ的矢一ひ

さて事鏑口の面目く世事一布衣記こ云ふさうりを
鏑口の骨法といひたるこ矢の相と書れ相と云ハま
書の相なり

一　京丹坊の河周梨慶秀ハ衣の作こもくき白ひの腰
巻を着たる方前こうれこさし白柄の長
刀杖ふたき

○もくきふ用ひ前こ見へさうり
○おりかハつて刀とも云柄を毛皮を入れる力く今世の
きこ大小の大北事くあれハ差用ふさしこいふ相
古書ふるくりりはしハほりくこ敬の意法
むく前こ事こもこたれとあふ用ひこあるこ

ちの作之信ふてくるのうちあると云も故の事

○白柄の長刀前ふこくしり

一 源之信頼政入道今日を京朝とも思はれ長信の
陸奥重高に志あらハ威の陸奥ゝ重高かふとも
思ふの作物伊豆守仲保ハ赤地の錦地重高
黒糸威の陸と云てしり云人事め是も
書き思さしりも

○長信の陸云これ思ふ記しぬ

○志あらハおとしの陸思ふ志るしぬ

○赤地の錦地云これおに見くしり

○黒糸威前ふこくしり

うをつよくひんためも書ハ思さしりとふてうを
とよくひんとするふハかつてのまひさしなとのさ
たけてうをふくふくひんとてハかの作ふとをぬ
くと形改のさとうふとを思さしりしもその四九
事之

一 筒井の浄妙明秀ハうちの重高ふ黒革威の陸思
ふ枝うふとの備をしめ黒志川の方と事古に思さる
黒ふうの矢ふひ塗以茂のうに好む白柄の大長
刀原ふ――八幡も思ふく拵ふりり貫行く
敗ふあり拵行拵とさくくとはすをる

○ふちの重高おふこくしり

○黒革威の腰白板胴おどしなり
○黒ちりの毛の九ヒ毛なる黒ちりおどしなり
○塗込度のちハ度巻のちりと上ちり深ぬりたる
○白栗の毛ちりこしなり
○つゝぬきハ毛皆のこと（但毛皆とつゝぬき別之毛皆ハたゝけなつゝぬきハたゝけなし）

一
足利ノ其日の装束ハ打葉の後の金物ハ赤革威の
腰ゝ三つの打ちる胴の後としの金作りの方
と第ヒさしたるきをちの矢おひ重度のちぬく連
浅芦毛なる馬ハ栗毛ハ黒ハ
鞍金ゝそ赤たりける
○打葉色の車ゝ記しぬ

○赤革威の腰ゝ三つの打ちる胴ゝ後ハ高しぬ
○金作の方ハ前ハ記しぬ
○栗ハこゝつゝ打ちる金ハ人の鞍ゝ後ハ高
しぬ

一 四ノ九九
源大夫判官義経ハ俣野の五郎の伴の赤革威の
腰ゝ三つ白月毛なる馬ハ金ハ人の
次第九と云ちりの剣の者ゝ白ひの腰ゝ夜
かゝとの後としめ
○俣野の五郎ハ赤革威ハ記ちゝ
○ゝ後威の腰ゝ後ハ記しぬ
○金作胴の鞍金ゝ前板胴のこと

○ もゝき白ひの陰ゝ段々ふと小形こゝ(さり)

一 重代のきゝ毛あり唐革と云陰をといふ〳〵ふ入くかせらる
道中ふき赤地の袴の裏〳〵れふ〳〵もゝき白ひの陰きく
連銭芦毛なる馬に金伏瀬の鞍置く〳〵ふ〳〵(り)
副将軍麻摩多志度ハ緋地の錦の直垂に黒糸
威の陰ゝ〳〵黒き馬のたくましきこゝ(ふ)かけ
地の鞍置く〳〵ふ〳〵(り)

○ 唐革の陰前こゝ(さり)

○ かゝとハ唐櫃こゝ古き甲冑を唐櫃ハ入置〳〵唐
櫃ハ是の付〳〵る櫃なり

○ 赤地の錦ハ直垂もゝ白ひの陰金ふく黒人の下

何とも云こゝ(さり)

○ 緋地の錦ハ直垂黒糸おゝしの陰もおゝこゝ(さり)

○ いうけ地のゝ〳〵ふ陰ふ(ゝ)ぬ

一 五ノ巻四 今度も陰付き平四郎ふ唐対馬ふ源義親を追
討の為に出雲国に下向を〳〵例として鎧斗陰て
うの鎧ふ入く新毛の前ふ〳〵ふとさゝて下ふ見る

○ 陰ハ敵の陰なり敵〳〵ふて射陰の為と云かく譯
馬をおゝて〳〵唐櫃ふ入ふ〳〵の敵の陰今
下なり金剛陰のゝ〳〵成ゝ〳〵ふ〳〵ふ

一 板の四郎永茂とゝふ黒陰なり——もゝきおゝしの
陰ゝ黒糸威の板矢二腰うさゝ〳〵ふ〳〵(り)る用ひ

置こ五枚うふとの緒をしめたるものとくこのつたる白
柄の大長刀黒毛川の大長刀左右の白小持毛ふ
○もつきおとしの薄黒糸威五枚うふと黒漆の長刀ホ
前まきたるしぬ
○四つしうふとハ黒革たるしぬ
○ちのしのとくこのつるとうやとえ茶の茶
とくこ四もくそうるとふとくのたるとハそうふ
とふとく
一覚明の長日のてはたくかちの彩てれふ黒革威の
薄とえくこくたる川の長刀と常太さしたる黒ほろ
の矢頃ぬりこめ籐のう腰てきみうふとを佩くこう
紅ふう常籐のほしたくか小袖長元おし

○うちれ重藤黒糸威こくたる川の長刀太さしたる黒ほろ
の矢ぬりこめ籐のうこうひも皆ちとえてうり
○籐の四つたくこいつたる籐のこの西とうふこ小袖長
元を籐の四つたくふさしてきみ金たるくをしく
黒革ふたるしぬ
一秋茂別高實盛ハ梅ヶ香ハれハ赤地の錦れ直
垂ふこうき威の薄黒くく淋形おうる男の緒と
しの金作りれ長刀とくれ太さしるきの矢
頃重茂のう持く連銭芋毛ある馬ふ金ふくもん
の鞍金くく赤たりりる
○小糸のふし皆前こうり

一 経政卿ハ紫地の錦ハ重衣にもちゐき白ひの袴をも長ふくもんの太刀を帯き給ひしかとも重衣の下服もさみとりなりしを後くに言はれけ

○紫地の錦の重衣ハ白き袴小唐倭織

一 木曽殿ハ紫糸ハ赤地の錦ハ重衣小唐倭織の陰ハ黒ふくりの太刀をとき給ひしたる

きもの矢負ひ重衣の下服をきみ胃を後くに言はれかけ――十郎義人行家ハ緋地の錦ハ重衣

黒糸威の陰きく黒漆の太刀をとき給ひしたる大中黒の矢をひ塗ハ重衣の下服ふさみ巻もうふを後くに言ひもこかけ長くひりり

一 ○紫地の錦ハ皆黒くなり

平大納言時忠の卿ハ重衣の下服ハ

○ふくりの袴ハ重衣の袴ハ

○ふくりの袴ハ詳ふくりとハふくり保成ハ宇治川小水英とハ英ハ英ハ白ふくりちいさく白ある英ハ重衣の形のとく細くちいさくふくり保ハしたるをいふ

○いとくもの重衣ハ糸芭布の車ふくりハ武者ハ

ハ今芭袴とハ糸芭の

ふくりの異なり

三浦ハ赤地の錦ハ重衣ハ黒糸威の陰きく

こくもの門の太刀をとき給ひしたるきもの矢負

重衣の下服をくさみとりを後くに言はれけ腰を

うめく院宣を給はれなんとて

○世系の号を為さんとてなり

一 妹尾小僧これ武をかきの重宝につめり武ハ布の小袖なりまゐりしやうも腰奏はゝ山うり不二ゝ腰矢ともあこさゝかきあひ〳〵数合其勝二千騎人

○山うり不詳なり只蔵殿をいふ成し

○三腰ハ三の条腰なり武ハ〳〵成〳〵共も蔵殿をとゝ成ハ〳〵ハ武の員を注所やこひの拾さい〳〵らゝたるをいふ成〳〵

○武人の詳ハ武をそ強の個立ありとも云〳〵竹をまけて拾ひ〳〵腰ゆりそハを世のあるゝ〳〵又

一 ハノ所ニ 報判官和康を軍の奉行ハ〳〵市有の西の法いうきのこふのほり竹ゝ立たりうう奇地の浦の重宝こうふを斗りそ若こりるうあとふハ四天を書おしたりる行ひこハ浮ゝを持ハ合刎陰を持く

○奇地の浦の重宝ハこゝとり

○うふと斗そ若こりるといふハ陸ハ若さるゝ

○うふとふハ四天をこそ書おしたりると云四天王乃

像ゥ又ハ天名号ハ法成そ若こるこハ

一 法ハさう腰とハ奪の用の天をきしたる腰なりとそ

例を引されとも世系こハ只蔵殿神と云られハ世系の

腰の事と見るゝ〳〵

知康ありてうゑしき百ゐく洋後ゐとを持たりと皆おこ
ゐ〻しき洋之洋ハ人〻世の後く
一 右ゝ打雑方も後ふ立ち同し〻ゑく葦の陣（初出）
○ 世条ゐ如ゐ〻
一 豊後の打宗長本蒙古のゑくれふ打ち侵し〻ゑく
伏奉せ〻れたりゝ
○ 本蒙古の立ち入れ立ち同し〻前と又〻さり
一 九ノ十九 家ふきてよまゝ〻の引〻〻れと附成の後ゑく連陳芦毛
たゐる馬と金ふく〻又人の鞍ゑ〻ゑく意たりゝ武士——
長流判官代重個と名京
○ 世条の所〻ゑるおこ又〻たり

一 来国の御太と見〻（ないうまよも皆かさ市がかゐ同くゝと
十もゝ千ぬふ大打九府 洋書子義経
○ ゝ市ハ元来ハ唐ふ分る志ゐし〻後こハ神市とも
芸市といて其所ゐの市也 名ゐも云来ゝ
成たりゝ多ゐ百ヶ条の詩こも記し〻ぬ
一 義経其日の装束こハ蒙古の洋也立ち入そこめ
後ゑく洋形打ち引る唐の佐をしめ金花の方と
常ゝ出さ〻しゐ引きて〻ゐの矢ゐ〻主後のゐ弓新の
ゐと洋と後さ一ヶ升仰く左奏ゝ老ゐる長そ
今日の大打軍ゝ市とハ又〻——
○ 蒙古の洋ゝ立ち入洋形金花の方出さ〻たる

きこゆるこの矢主殿のら弓あに記しぬ

○筑すそこの淺茅淵こゝに記しぬ

○らのこゝろおの布と俗と唐さ一寸斗こゆて表毛と毛

たり兵そて今日の大将軍の京とハこゝ〳〵と云ハ豊臣

氏ハ唐位の俗と切〳〵らの弓矢の初とたゝそそ

毛こゝりゝこゝかり古書ハ大将軍ハ必らの弓矢と

俗こて巻こ〳〵と云 清盛も三尺義経ハ法軍勝ハ

まきれぬ為ハ俗ハ〳〵京と毛れ〳〵るこ〳〵装束

因和と唐唐人の指ら拵を白檀氏位物たん代

うゝ中〳〵巻毛車こゝりゝそハらの恩祐丙

と毛こゝこて弓矢斗と巻ハ行ふた 拵とまくと

ふハ丙こふ

茂のこゝこゝ所事とそ所きるこもるゝ只大将軍の

京と巻たるこゝ〳〵らのこゝ〳〵ハ人こゝの弓

矢を巻こゝるハ義経一人巻たるゝ〳〵今日の大将軍

の京とハこゝ〳〵こゝ〳〵中〳〵此事ハ〳〵法と有

ハ君〳〵

一 本弓殿其日の装束イハ赤地の錦丸直垂と唐織

威の淺葱〳〵ハうもの代りの古刀を帯附形おゝ

うゝとの法をしめ太刀さしまるいし〳〵の矢の長

日の軍こ射〳〵ハ強りたゝこゝらこゝハ頃るし

主殿のら吉中れ〳〵ハ本弓の鳥河毛と

ハ馬ハ金海〳〵黒人の鞍をきこ〳〵ハたりゝるゞ

○ 然象の馬に行とも有べくたり

○ 右行の矢筈に記しぬ

一 擬口の次第ハ降人なりしう頼りに主の供せんとやれハ
きしハとて行ひとりの主意と主君に仕へ奉られ

○ 屋すりの主意赤とくとり

一 白芦毛なる老馬小漬にて主白栗にて付白栗毛
くすりけ芦ふ返主くいまく知ぬ隠山へ入ふ

○ 院にてあこうとり

○ 白栗ハ白みうきの毛に連てる栗つはりまと對
て白と以ふ

一 無谷の真夜の裝束ハうちの主意と赤革威の
漬毛くに白の毛衣とうけごんと栗毛と云ふ名馬ハそ
赤とりるふ真小次第主家ハ赤もたると一ふとう
たる主意ふ嶽〻滝月の漬毛くに白月
毛なる馬にて赤とりる嶽さしハきらんの毛くれふ
小板を黄ふ返したる漬毛くに黄毛なる馬にて
赤とりる

○ かちの主意赤革威ふ〻滝月の漬きらんの
主意小小板と黄ふかしたる人ハ名したる
漬りとも黄ふ〻〻たる しとハ主月返なる
○ おもたりを一〻毎主にてるとれとふ主もの
の毛とれ一〻毎主にてるハとうふきとふ

落りおこたる

○藤兵ハ馬ニてく藤を持用ゆく

○和の物ハ武ふ田ゐ〳〵但乙世のとく田ゐ〳〵こほろゐひを

と色むはるゐ物ゐ〳〵ゐ 蓬 保元考ふ記し、

主恩

一 平山ハ主月信の家〳〵れこ御おとしの陰ゑく二ツ引

あの物衣をうみめゞをけと云 甘ゆる花馬ハ高たり

りる藤兵ハ思年おとしの陰ふうををねこひゑる

陰くさひ月毛ゐ馬ハそ高〳〵りる

○志け月信御おとし思年盛の陰ゑる前ゑ〳〵ゑり

一 小次郎ハ白頭たりうさん陰つきを考せよう〳〵かく

九〳〵七

ゑ考ゑこゆうこふゆよ月うふと射さするゑとそ敷りる

○陰つきと考せこと八陰をゆう〳〵つきの前〳〵ゑる

陰春く 陰つきよつきの字奥又衛又有

おしの家と用ゆ八淋〳〵

う〳〵かゑゑる陰つきとゑれハ陰動〳〵ゆく矢の中り

つよか〳〵ぬゆく〳〵かゑぬハふ殿くうまて

ゑゑぬといふく

○月習かふとの月く又云陰の三年志ゆる付陰を月

りゆけゑゆるハ陰つきゑ考く

一 独甲次郎手盛次ゆむ裝束るれハ小村濃の主恵ふ

あゑゑしの陰ゑく 淋形おゑる習の法としの人全

仏りの考刀を年太ゑさしたるまゑゆの矢頁主義の

ゐ紙まきみ連歳芋毛の馬イ金ぬくまの人の鞍をて寄たるの

○山村屋ハ海の村屋こ小ハ俵をこ体村屋ゐこ〳〵ゐ小

のゐこ皆ま〳〵にこ〳〵たり

一馬ハ金〳〵くけこをたきゐ枝実こ〳〵生田の表めさかきを寄り

ゐこ〳〵成の中〳〵そ入たりゐり

○げこ毛ハ茅屋のをこ蘭茅ゐをて作りたるをばわげこと云

茅ゐそ作りたるをまゐのげこと云又こゐ〳〵ゐ

一云ゐとしの隆ゐく月毛なるこ金ぬくまの鞍をて寄たりゐ

武ゐ一騎——人見四郎

○ゐ寄のゐこ皆おゐ見〳〵たり

一歳ゐ毛ゐ恵度——海北の海の玉寄ゐ武蔵の隆ゐて寄きゐの

ふこ〳〵たくま〳〵さこいうけ地のこ〳〵あきこ〳〵寄のゐたりゐが

○ゐ寄のゐこ皆茅ゐこ〳〵ゐ

一和三位中将重衡ハ——かちこ白茅ゐゐ毛ゐくま

嵯峨村千毛源こゐる玉寄ゐ紫ゐそこの隆ゐく

袖形打ゐる由の法をしゐん金作ゐ古口を茅

ゐ四さ〳〵たるきゐこゐの矢度重度のゐ打〳〵こゐし

麻毛を云ゐ四ゐる名馬ハ金伏海の鞍をくのり

ゐ〳〵り乳母ゐの度茅無成長八幡月伏の玉寄

ゐ佛威の隆きゐく三位中将のさ〳〵も云ゐゐ毛

見ゐめゐ——月毛ハ茅ゐて寄毛ゐ迄ゐる

○ゐ毛ゐ白茅ゐゐ寄ゐ毛ゐく嵯峨村ゐ毛作ゐ毛ゐこれ

芝浦新しくたる云てこれ之ちんもく白黒
なる糸と八白糸と黒いてこれ中ほ前こてこ
一 実こ傳世ハ稀世なる車蓋こそ白ひの隆きく
微形新たなる男の帷とし金物の方と第二十
四さしたるきりもこの矢原く実度のうちを技連陵芦毛
なる馬り金物く男人の鞍を黒く赤たりる武志
一弱
○ 傳世と今世こ考しのしめとりものくさも隆物の
車蓋こ世外の糸こ皆前こ八こてこり
七六
一 出肥次席貴年本業化の車蓋こ小具を十
任を三十金物引きしこて

○ 本業化の車蓋ハ八こてこり
○ 小具ハ隆下付こる小具ハ小具
の事保元物語こ記す
一 三位中将ハこもこの車蓋を打ち用ひ
○ こもこの事ハ考こ考るしぬ
一 佐こ本三席盛綱ハ葉内ハ知りたり室月隆
車蓋こ云ふとしの隆芦毛なる馬り
金物く男人の矢原こ赤たりり
○ 計条の糸こ皆こ考こてこり
一 利長共日の装束ハ白黒の帷れ車蓋こ第下懸の
隆芦毛ハ鞍赤ハ武志本化の帷を しめ金物の方

と者ハ出さしたるきてうの矢頃ハ変めうきの中とり

○世家の弓ハ皆竹をもつくるなり

一 佐登殿永軍のゝ中ハ竹をとく清重ハ光ちかた

かゝ美濃の山神小唐倭威の渡ゝくいうもの作の

右力と者ハ出さしたるうちの矢頃ハ変めうを

をもちゆるなり

○かゝ光保ハ唐光保なるゝし光保ハ今世の志向り

保ハ弟ハ美月のゆとハ白く成ゝ唐とを

矢ものうり家りしと云ふ作のゆゝ者ハ

○たうこと了の矢ハ鷲の尾羽くうしてとを羽ハ

白くしてゆゝの弓ハ黒きくいふとの中の

一 佐登殿の童子菊丸と云 大力の剛比者なるき

威の渡光ハ三枚胴の倭とし矢

○世家の弓ハ前ハ丸くてなり

一 弓市真氏乃沖の男ハかちハ赤花の倭とくあゝ倭

神ゝ丸ハ右ハ弓ハ黒き威の渡ゝくいう白の右力を

ゝ丸ハ出さしたるきてうの矢頃ハ三寸の羽

刻ゝくいうるゆゝめの倭とを光保ハ倭

ら 胴ゝくるみ 胴とハ倭ゝ言ハ小ゝけ刻者の

所者ハ長ハ

○[illegible]花の帥とかくかの[illegible]神とへたる事[illegible]
[illegible]かち布[illegible]体の[illegible]きこ陽神とハ事[illegible]の神一幅[illegible]
神口の[illegible]の寸幅とて[illegible]神とへ[illegible]たるとハかち布の事
[illegible]の[illegible]陽神と[illegible]の帥[illegible]陽神
とりたるこ

○うしきりふき[illegible]海の[illegible]のこ[illegible]きこ

○めこめのめこハ麻の角にて作りたる隅なりめこ云
めとしハ角のこの[illegible]の[illegible]成[illegible]の者云

○[illegible]の[illegible]作[illegible]右の[illegible]者[illegible]

一[illegible]き馬の[illegible]造しきこ[illegible]ハ[illegible]たる金[illegible]の
[illegible]金[illegible]

○金ぬく[illegible]の[illegible]者こ[illegible]
[illegible]千七百[illegible]代させの[illegible]成と[illegible]
[illegible]小[illegible]せ[illegible]きこと[illegible]れハ

○[illegible]ハ[illegible]
[illegible]云万[illegible]集[illegible]の拝[illegible]
[illegible]武[illegible]の具多[illegible]
長さ七尺[illegible]人[illegible]
の[illegible]云[illegible]根[illegible]も具多[illegible]の[illegible]
ウメうしとハ[illegible]丸[illegible]
多[illegible]八九十尺[illegible]又[illegible]七[illegible]
[illegible]

一 義盛之答にはいろいろのこときあるへし

一 義盛之旗作りて白旗一流あへしと先負て小太郎十六騎
皆白装束にて出立て北向ふ

〇 此条不同なし

一 童 其日の装束には木蘭地の直垂に洗革の鎧着て
御前に参てそ出ける

〇 もくらん地の直垂なりときこえけり

〇 洗革の鎧候と見へけり

一 白箆に鶴の本白鴻の羽剣合て作りたる矢の十三束
三伏有けるを小舎人して一束半さして和田小太郎義盛
とうるしてぞ書付ける

〇 二所まきハくちまき之 東隆にハ口巻と羽の箆口と巻也
黒巻と云ちと法 為青花也 二所まきとも云所
巻と云詞小付て皆 の字を作り用ひて云之

〇 鴻の羽ハこうの鳥なるへし

一 四九五
白箆に鳥の尾をもて作る矢の十四束三伏有けるを
川巻より一寸斗おきて伊勢国住人 仁井 紀四郎 親清
とうるしにて 書付る

〇 此条不同なし 鳥の羽のこと前に記た

一 足ハ箆のよハくなる矢束をおし 見しらくなる八同しくハ義
盛か奥足にて仕りん とくく

〇 義盛か奥足にて 仕りんと云は奥足ハ反を云となり

[illegible]の表と異なることいふまでもなし

一 後伯今日を最初とせり[illegible]花の御の恵賞小唐
倭威の淺若く淋形おそる男の佐をしめいう
物作りの古刀を常古さしたるきをうの矢頭ひ
を後のうれく

○ 此条の[illegible]こと[illegible]唐後威おこと[illegible]

一 大臣殿ハ浄衣を召り――春日殿清宗ハ白き直
衣にて父の御車の後ろに立ちり

○ 此条[illegible]

一 樋の御方く生捕小せ[illegible]たりし 二十四人のもめとも
皆白き直衣にて[illegible]の前にハ小ぬ付てそ渡されり

一 古佐坊昔の装束ハかちの直衣に黒革威の腰若く
赤皮ちやつきんとそ若てそりり

○ 赤皮ちやつきん[illegible]乃中貞丁乃中ゐて書なり
義経記豊養記淀矢年中行事等こくそり
判装のこのうしろ[illegible]後二年合戦の佐
赤り武家[illegible]の馬そひの力石赤皮ちやつ[illegible]
[illegible]なり祥見[illegible]り[illegible]地[illegible]頃之の赤り[illegible]乃中
なり

宮内庁書陵部
図書寮

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan